

京都市左京区 宮崎 正雄 (81 歳)

昭和 20 年 8 月 15 日正午、私 (5 歳 9 カ月) は、母親と弟 (2 歳 6 カ月) と 3 人で釜山の波止場に正座していた。そこには日本の方向に向かい 40~50 人の人が正座していたが、大半は女性、老人、子どもであった。その人ごみの最前列には真空管ラジオが置いてあり、スピーカーから敗戦の勅語が流れていた。

私たちは南方から転戦、転戦と言って兵隊さんが来るのを見ていたが、3~4 カ月ほど前から負け戦の情報が流れ、母親は住んでいた京城 (京城府中区黄金町 4 丁目) を脱出することにした。すでに父親は関東軍の補給のために動員され現地招集となり、京城龍山の軍隊に入隊していた。

家財道具はそのままに、タンスの中の品物をお金に換えようとしたがかなわず、母親の花嫁衣裳などは親切にもらった現地の人にあげてきた。母親は弟をおんぶひもで背負い、両手に持てるだけの荷物を持ち、私も着替えを両手に持ち、リュックを背負い、着の身着のまま京城から釜山までの逃避行となった。

釜山の港近くの旅館に泊まり込み、日本に帰る算段を考えていると、同じ宿に泊まり、島根に帰るおばあさんと孫娘さんの 2 人がいた。ぜひとも同行していただきたいと申し出があり、帰国一行は 5 人となった。母は毎日港に通い、日本の下関まで送ってもらう漁船、いわゆるヤミ船をチャーターするために探していた。近年新潟などに流れ着く漂着船と同じ大きさである。

5 人でいくら支払ったのかはわからないが対馬に寄港し、ようやく出港から 1 週間ほどで下関港に着き、下関の駅で同行の 2 人と別れたが、京都に行く列車はどれも満員で乗車は無理であった。母親はすぐに引き返して下関港にいた同じ船で、天保山までの交渉をして、再び乗船することとなった。瀬戸内海は日米両軍が敷設した機雷にいつ接触して爆発するかわからなかったため、船は沿岸線を 100~200m 程度の航路と、日中しか航行できなかった。

無事大阪駅までたどり着き、京都までの列車は超満員でとても乗れなかったが、窓を開けた兵隊さんが「坊や、どこへ行くの?」と声かけしてくれたので「京都まで」と言ったら窓から手を伸ばし、列車に引き上げてもらった。母親とおんぶひもで背負われていた弟は、何とか乗車口から乗ったのを確認した。やっと京都に到着し、先ほどの兵隊さんにまた窓から出してもらった。

私の後ろからついてきている母親と弟を見つけるために、両手に持った荷物を降ろして振り返った瞬間、脱兎のごとく 1 人の子どもが荷物を取って走り去って行った。一瞬のことで声も出なかった。同年代のおそらく孤児と思われるが、今でも脳裏に浮かんで離れない。

島根に帰った 2 人とは NHK の尋ね人の時間に何回か放送をしてもらったが、連絡はつかなかった。母親は既に亡くなったが、もう少し詳細を聞いておくべきだったとつくづく思う。